2021年開催となった東京五輪でもソフトボールが競技の先陣を切る。来夏に39歳となるエース上野由岐子（ビックカメラ高崎）＝福岡市出身＝らベテランに1年の延期が与える影響について、元女子日本代表監督の宇津木妙子氏は懸念される「年齢の壁」を否定。一方でチーム練習の不足などから連係を含めた守備力の低下を危惧し、金メダル獲得に向けての課題に挙げた。

上野〝年齢の壁〟ない

「言動から覚悟伝わる」

ソフトボール元代表監督 宇津木妙子氏に聞く

うつぎ・たえこ　1953年4月6日生まれの67歳。埼玉県出身。ソフトボール女子日本代表の監督として2000年シドニー五輪で銀、04年アテネ五輪で銅メダルを獲得。NPO法人「ソフトボール・ドリーム」理事長として競技の普及発展に尽力し、日本ソフトボール協会副会長、世界野球ソフトボール連盟（WBSC）理事も務める。

チーム浮沈の鍵を握る上野について、宇津木氏は「（延期を）前向きに捉えており、言動から『覚悟』が伝わる」とみている。「背負っているものというか、自分だけの『上野由岐子』ではないと、彼女は理解している」。自粛が解除されてから上野の練習を見る機会があり、ボールの動かし方も細部にこだわって投げ込んでいたという。

「（宇津木）麗華監督の現役時代がそうだったように、上野も『勝つために（自分の使命を）やりきる』という姿勢が明確。共通したものを持ち合わせた、あの2人が監督と選手として五輪に臨む。これは強み」と言い切った。

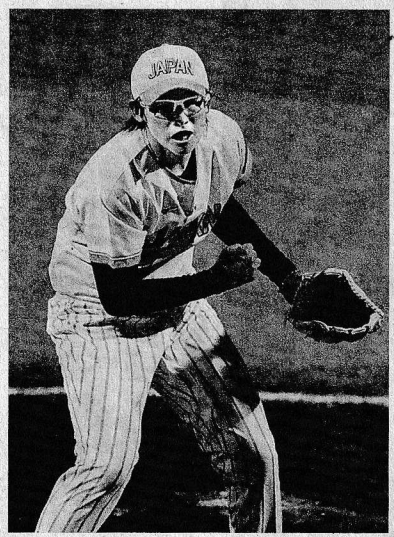
エース上野と投打二刀流の藤田倭（太陽誘電）＝長崎県出身＝が投手陣の2本柱となる。「確かに強力な二枚をそろえている。上野の投球自体に問題もない。あとは、どうやって守るか」と、宇津木氏は指摘する。

強敵の米国の打者全てから三振を奪うのは不可能。打たせて取る投球を実現するには野手陣との信頼関係が欠かせない。2008年の北京五輪では上野とあうんの呼吸だった内野陣が、上野の投げる球種によって打球を予測して、確実にさばいていたという。

「上野や藤田の配球を理解した上での守りができるかどうか、心を通わせることができるか」。昨年から年明けの海外合宿にかけて着実に図られていた強化がコロナ禍で中断。チーム練習ができないことによる影響を懸念する。

代表15選手が未発表のまま、延期が決まったことを宇津木氏はプラスに受け止めている。「代表に決まって自覚が増すこともある半面、心の油断が生じる可能性もある。その辺りの自己制御は難しい」。代表選出のボーダーにいた選手はアピールする時間が増え、若手にとっても成長の好機。最後に宇津木氏はこう付け加えた。「相手も同じ条件だけれど、他国の分析や戦略を練る時間も確保できた。麗華監督がこの1年をどう生かしていくのか見守りたい」。グラウンド外の情報戦も金メダル獲得の成否を左右する。

（西口憲一）



ソフトボール女子日本代表のエース上野由岐子　＝2019年